見て居りましたが　劉寶にとうも君は天晴の勇士ある智者かり我れ今日まで君を見るに智ありと雖ども勇に乏しき者あると思ひしに此の度の致し方實にとうも天晴あり暫らく當國に足を留め玉はらは即はち此の荆州に於ても安堵の思ひをいたし人民一同將軍の此のとゐろに留まるを喜ぶに相違ない眼に某かしも安堵したりとあつて悉でとく是れを賞めました然るとゐろ前申し上げたる彼の張虎の乘りましたる馬は其の後玄德己れの乘馬といたして居りましたが之有名の的盧でございます後に襄陽の會に命ちを助かり檀溪を越へて其の名を天下に知られたるも全たく此の的盧といふ馬があつたるがゆえでございます夫は後に委しく申し上げまするが其の内にもうどうも劉表は飽までも劉備玄德を信じ且心置きなく何事をも相談をするといふ事になりました扨其後に至つて劉表倩々考へ

ふるに今亂世でございまするから何時敵兵是へ寄せ來たるも知れず其の内に漢中の張魯、吳の孫堅如き人ば襲國ふるに依つて此の襄の汕蹶を見て寄來るやも斗られずと劉備玄德に向つて相談をすると劉備答へて　劉將軍左のみ案じ玉ふな我が空來充分に固め居れは少しも案ずる事なしとあつて江夏の城には關羽を守らせ趙雲に三江を守らせ孫堅の備にとして差置き張虎其人は南越の境を守らせ充分に是も人數を配りましたなれは荆州の城下に於ても是なれば大丈夫といふ處から劉表悉でとく是を喜こんで居りましたさうゐると愈よ蔡瑁を初めとして惡人等は今當國の要害第一と思ふ處を劉備玄德の家來に守らせるといふは甚はだ危うい事盤は甲に似せて穴を掘るといふ譬の如く終には彼等の爲に其の城を乘取らるゝ事になりはせぬか何卒して彼等を追拂はんと思いましたるから終

に蔡夫人に對していろ〳〵に此の由を告げ　蔡今の内に玄德を除かざれば後には此の荆州の憂いとなり四十二州全たく彼の手に落るに相違なきゆえどうぞ將軍に對して夫人より宜し く此の事を申し入れられん事を望む」と充分に己れ等に底意があるから斯く述べまする と蔡夫人といふ人も誠にどうも宜くない女で已れに於ても望みのある處ろから房闥中に於て夫に對し事を告げ讒言を構へましたけれども中々劉表も婦人の讒言に依つて己の方針を曲て劉備を放逐するやうな人物でない何をいつても少も取合ゆに居ました然る處が劉備玄德の乘つたる馬を劉表頻りに望みまするに依て玄德も固より分捕の品ではあるし劉表の望でありますから是を進ぜやうと云て快よく劉表に參らせました劉表も貰ば貰つたが餘り好ひ馬で内々其の馬相も見て貰たいと思いましたるからソコで家來の内に

蒯越といふ馬相を宜く見る者を招いて玄德より遣りたる馬を見せました蒯越其の相を觀て　蒯是は誠に駿馬である併しながらどうも惡い相があります眼下に涙痕あつて額に白點あり白點と申しますから白い差毛があるのでございませう此の馬は乘人に害をおす惡相にして、前に逆意を企てたる張虎の乘つて居りしを玄德が分捕りましたる馬にて是を的盧と申しますと物語りをいたしました　蒯然れば是にお乘り遊ばす時には御身に害を加うる事に立至りまするに依つて、夫となくお戻しに相成つた方が宜しうございませうと」蒯越明さに申し上げた、茲だと思つたから蔡瑁丼びに蔡夫人は劉表に向つて

蔡夫ちやに依つて、豫て玄德に底意のある事を申し上げたのでございます、右樣恐ろしき馬を君に進ぜるといふは誠に心惜き業にて仮令お望みに相成つたればとて、先づ馬相を見せて然

る後に宜しければ差上げるといふは眞の道ではございません
が、夫を望むが他に其の日の内に送るといふは此の馬を以て君
の御身に害を加へんとあす彼の心底に相違ございません、決し
て決汕斷あつてはなりませんぞと」喋々と申し。述べましたに依
つて、流石の劉表も成程さうかと思ひまして　劉「爾越全たく此
の馬は悪い相があるのか　爾如何にも悪うございまするに依
つてお召しおくしてお留りおさい　劉「然らば玄德の許へ早速
戻さうと、ソコで其の翌る日になつて劉備を招いて　劉「扨其許、
より貰ひたる處の馬に就て然々考がうるに殊様なる名馬には
足下の如き人の乘つてゐる役にも立つべきなれ、劉表の如き年
老いたる者には中々乘あおせんに依て、折角申し受けたけれど
も一旦お戻し申すゆゑ左様心得て貰ひたいと」氣極り悪氣に思
しをいたしました、玄德といふ人は自分が悪い巧みをする人で

あるから別段さういふ深い仔細のある事と知らず、玄「左様で
ございますか、然らば手前が乘馬をいたしませう」と心易く受取
りました　劉「就ては劉備御身も此の襄陽にのみ居るは誠に樂
みもあければ我が領地にして、是より一里ばかりを隔つたる處
の新野といふ小城がある、是は要害誠に宜き處ゐれば、此度張虎
陳生を討つたる禮として、新野を其許に進ぜやう依つて早速身
へ引移り、新野の主人となり玉へ」玄德は跡へ下り三拜して　玄
「今日世捨人なる玄德を、夫ほどまでに思召し下さる段、誠に辱な
けない、然らば仰せに從がつて、新野の城は申し受ける」此の新野
といふは先づ日本でいへば、名古屋から犬山邊りの間を隔つて
居る處で、四万石か七万石位の高の上る處でございます、是を
得て玄德を大きに喜ふび立歸つて關羽を初め一同に右の趣む
きを語ると、小城ながらも一城の主人とあるは誠に喜こび

しき事であると、一同も喜ぶべき夫より早速新野へ移る事に相成りまして、人呼んで新野の玄德といふやうに成りました然るに蔡瑁蔡夫人等の惡計に依つて却つて玄德を倒さんとするの奸策を廻らし襄陽に會を開いて劉備を討たんとするを報知するものあつて、辛く危うきを遁れ的盧に乘つて檀溪を越るといふ件に相成ります

三國志卷二終

明治卅一年二月十一日印刷
同　年二月十七日發行

（三國志卷之二）

發行者　東京市神田區佐久間町三丁目卅八番地　市川路周
同　淺草區公園第六區三号百四　桃川燕林亭
講演者　蘆野萬吉
印刷者　同　神田區鍋町二十四番地　横田磯吉

發行所　東京市神田區佐久間町三丁目三十八番地　文事堂

文事堂 談講小說 新版書目

徳川燕林講演 今村次郎速記 赤穂義士 **四十七士傳** 全十冊 一冊ニ付二十錢 全部一割引	桃川燕林講演 今村次郎速記 **徳川十五代記** 全七冊 一冊ニ付二十錢 全部一割引
桃川燕林講演 **大久保彦左衛門** 全三冊 一冊ニ付二十二錢	桃川如燕講演 **佐倉宗五郎** 全二冊 一冊ニ付二十二錢
伊東陵潮講演 **鬼坊主清吉** 全一冊 二十錢	桃川燕林講演 敵討 **鶉權兵衛** 全一冊 廿五錢
錦城齋貞玉講演 **梅野由兵衛** 全一冊 二十錢	眞龍齋貞水講演 俠客 **會津の小鐵** 全一冊 十八錢
桃川燕林講演 今村次郎速記 **太閤記** 全二十冊 一冊ニ付二十錢 全部一割引	桃川燕林講演 今村次郎速記 通俗 **三國志** 第一卷來ル十二月發行仕候
桃川燕林講演 **梅川忠兵衛** 全一冊 二十錢	錦城齋貞玉講演 探偵實話 **明治天一坊** 全一冊 二十錢
錦城齋貞玉講演 **荒川武勇傳** 全一冊 廿五錢	田邊南鱗講演 **高橋お傳** 合本 **山猫お蔦** 一冊 廿二錢
錦城齋貞玉講演 敵討 **俊徳丸** 全一冊 十八錢	桃川燕林講演 **松前屋五郎兵衛** 全一冊 廿二錢

錦城齋貞玉講演
石井常右衛門 全一冊 十八錢

錦城齋貞玉講演
白石嘶 全一冊 十八錢

錦城齋貞玉講演
俠客三甚内 全一冊 二十錢

旅行舍松林講演
座光寺源三郎 全一冊 二十錢

水木舎痴遊講演
治太平記 全二冊 一冊ニ付二十錢

松林伯圓講演
高野長英 全一冊
渡邊華山 全一冊 二十錢

桃川森林講演
木戸孝允君傳 全一冊 二十錢

三遊亭圓朝口述
怪談牡丹燈籠 全一冊 廿五錢

西郷隆盛君傳 全一冊 廿五錢

伊藤博文君傳 全一冊 十八錢

大久保利通君傳 全一冊 十五錢

談洲樓燕枝講演
探偵實話 犬の仇討 全一冊 十五錢

松林伯圓講演
源平盛衰記 二十錢

十返舍一九述
東海道中膝栗毛 全一冊 二十錢

錦城齋貞玉講演
釋迦御一代記 全三冊 一冊ニ付二十錢

錦城齋貞玉講演
一刀流瓶割典膳 全一冊 廿二錢

桃川如燕講演
桃川十八講談 全一冊 二十錢

伊東陵潮講演
備前騒動 全一冊 廿五錢

松林伯鶴講演
探偵實話 女天一 全一冊 廿五錢

田邊南鱗講演
刈萱物語 石童丸 全一冊 廿三錢

錦城齋貞玉講演
柳生荒木 両勇士 全一冊 廿三錢

田邊南鱗講演
岩見武勇傳 全一冊 十八錢

小三金吾
娘節用 全一冊 十五錢

田邊南鱗講演
敵討天下茶屋 全一冊 十八錢

錦城齋貞水講演
長門義士 四人仇討 全一冊 二十錢

田邊南鱗講演
敵討三荘太夫 全一冊 二十錢

伊東陵潮講演
俠客赤尾林蔵 全一冊 廿五錢

田邊南鱗講演
俠鎗持勘助 全一冊 十八錢

尼子十勇士銘々傳 全一冊 廿五錢

錦城齋貞水講演
眞龍齋貞水講演
朝日奈三郎 全一冊 十八錢

大神宮本左門武勇傳 近利生記 二十錢

敵討阿波の十郎兵衛 近刻 二十錢